R01.08.29
SPODフォーラム2019
シンポジウム「大学教育の組織力を高める」

教育改善情報のロジスティクスを考える

－大学教育の組織力を高めるためのIR機能とその実践－

茨城大学　全学教育機構
嶌田 敏行

問題は何なのか？

2

- 大学教育の組織力を高めるために、IRにできることは何か。
- 実は、あまりない。（IRの枠だけで考えてしまうと）
- 大学教育の組織力を高める」ためには？ → （教学）マネジメント体制の構築 ≒ （教育の）内部質保証システムの構築
- IRは、意思決定支援機能。学内の誰かのために、情報提供を行う機能。
- では、意思決定（とくに、ここでは改善）は誰が行うのか。
- 大学全体の改善：学長や副学長、学部の改善：学部長、教育プログラム（ここでは、教育目標を持つ最小のユニット、学科等を想定）：学科長、各科目：各教員
- 改善は進んでいるのか？？？ → 進んでいれば、こんなシンポ（ry

どうしたら改善が進むのか？

3

- 上の人が、云えば、みんなが改善しますか？
- 評価委員や文科省に言われれば、みんな改善しますか？
- 各階層（全学、学部、学科、科目）で、それぞれの責任者が、「ああ、改善したい」と思ってくれないと、改善は進まない。
- では、どうすれば、みんなが「ああ、改善したい」と思ってくれるのか？
- そのためにIR担当者は、どうすればよいのか。

実際は、結構、みんな困っている

4

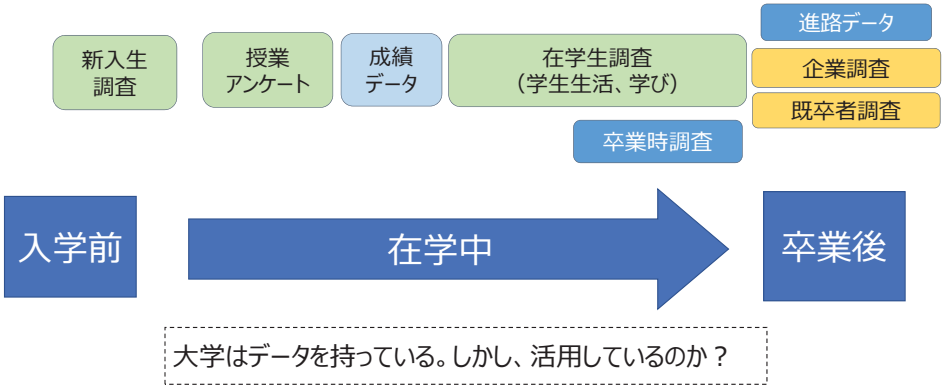
- 経験的に、学内で困っていない人はあまりいない。
- 困ってはいるものの、それは、多くが漠然とした不安であり、具体的かつ根本的な解決策が得られないまま、毎日を過ごしてしまうことが多い。（もう少し授業を手直ししたい、学生達にもっと理解してもらいたい、困っている学生を助けてあげたい…）
- 困っていることを放置しても、多くの場合、結構、なんとかなってしまう。（体重？、歯？、？）
- ただ、本当は、まずいことになっているかもしれない。

だったら調べてみればよいのでは？

- だったら、測定してみましょう。
- 体重なら体重計、血圧なら血圧計だが、大学教育の健康診断はどうやってするの？
- 学修成果？、どうやって測るの？
- 学生の学びの実態を把握できるのか？
- アンケートすればよい？
- どうやって活用すればよいの？

実は、材料はある？

- 各大学では、様々な学修成果を測るための取り組みは行われている。



大学はデータを持っている。しかし、活用しているのか？

実際には、改善もしてますよね？

- 各大学では、様々な改善は行われている。
- 改組したり、認証評価受けたりしている。
- FDだって、どこでもやっている。

↓

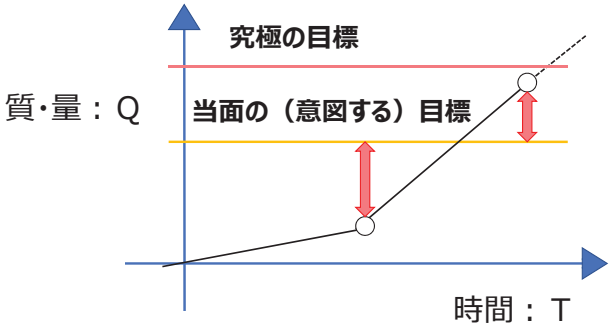
- 体系的、組織的に行われていないのが課題？

↓

- なぜできないのか？　（本当は、あまり）困ってないから？？？

評価とは何か

- 評価とは、目標に照らしてある時点でどのような状態になっているかを知る行為（＝現状把握）である。



評価活動をしたら、次にすべきことが、自ずと見えてくるような評価活動が理想

目標はありますか？

- 各授業：目標はある。
- 各教育プログラム（カリキュラム）：目標はある（DPもある）
- 学位プログラム：目標はある（DPもある）
- 大学全体：目標はある（DPもある）

点検

【授業点検】
- 授業アンケートは多くの大学が実施
- それを活用して教員が点検を実施？

【教育プログラム（カリキュラム）の点検】
- 学修成果やDP達成度から教育プログラム（カリキュラム）の点検をしていますか？
- カリキュラム・ポリシーに沿った授業が配置されて、機能していますか？

教育はチームでやるもの

- 各教員が、みんなで素晴らしい授業をしていても、全体で意図した教育目標を達成していなければ、ダメではないか？
- だからDPの達成度や卒業時の学修成果を測っているのでは？
- 部分最適化から全体最適化。
- ドアだけ作っていればよい？エンジン載せればOK？：どんな車作ってるのか、分かってやっているの？（→ TQM）

↓

- 即ち、教育プログラム単位での自律的な自己点検評価活動と改善活動（FD）を実施いただけばよい。

具体的にどうすればよいのか

- 口で言うのは簡単。実際にやるのは難しい。
- 現場の先生方が、「改善したい」と思ってもらうように仕向ければよい。

↓　では、どうやって？

【 モニタリング 】

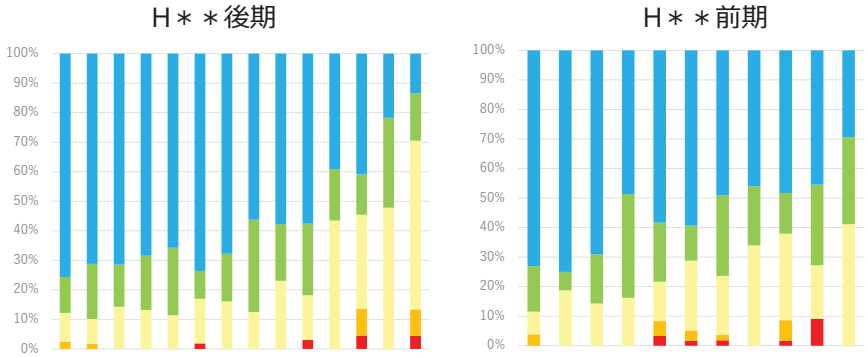
１．データを見てもらって、ワイワイ議論してもらう

２．改善はとくに求めない

【 レビュー 】

３．たまには、振り返ってもらって、改善した点を挙げてもらう

専門性向上　Q2：この科目はあなたの専門性の向上に役立ちましたか？
（１役立たない　←　３普通　→　５役だった）



ここには本来、科目名などが表示されている

■役立たない　■←　■普通　■→　■役だった

モニタリングとレビュー

14

- 日頃はワイワイでよいです。次に向けて、考えるきっかけがあれば、よい。
- データは、なるべく「こうだ」というよりも「現場の先生方の話が弾むもの」を用意する（聞き込みや自由記述）。
- 現場の状況はIRは分からない。現場の先生方が一番詳しいし、課題も分かっている。
- すぐに改善できない。１サイクル１年とか４年とか。PDCAのサイクルを１年単位でできるわけがない。
- だから、日頃はモニタリング。現状把握して、次にどうすればよいか、みんなが考えてくれれば、それでよい。改善は求めない、というか、求められない。
- ７年に１回とか、認証評価が来る。そういうときになったら、「どんな改善ができたのか」考えてみれば、普通は改善してません？？

場の提供、場の形勢

15

- 研究者の習性を利用（活用）する。研究者は、RQ（リサーチクエスチョン）とそれを解くための適切なデータ（資料）があると、議論（考察）せずにはいられない。

→ みんなの関心が高く、議論しやすい、分かりやすいデータ提供。

- 学科会議とか教室会議などの定例会議は、普通、どこの大学でもある。
- 教授会はちょっと大きいかも。10～20名くらいのユニットがやりやすそう。

改善し続けることが重要

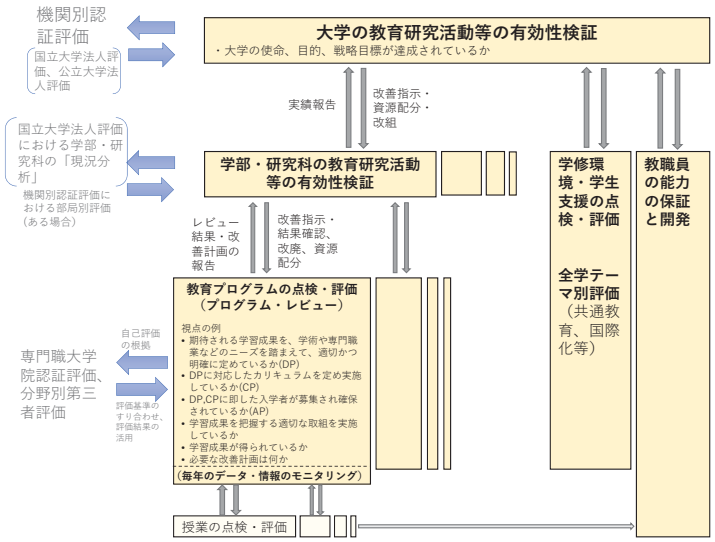
16

- 教育改善のゴールはない。
- 永遠にやり続けるためには、楽ちんじゃないと無理。
- 日常的な営みにする。

↓

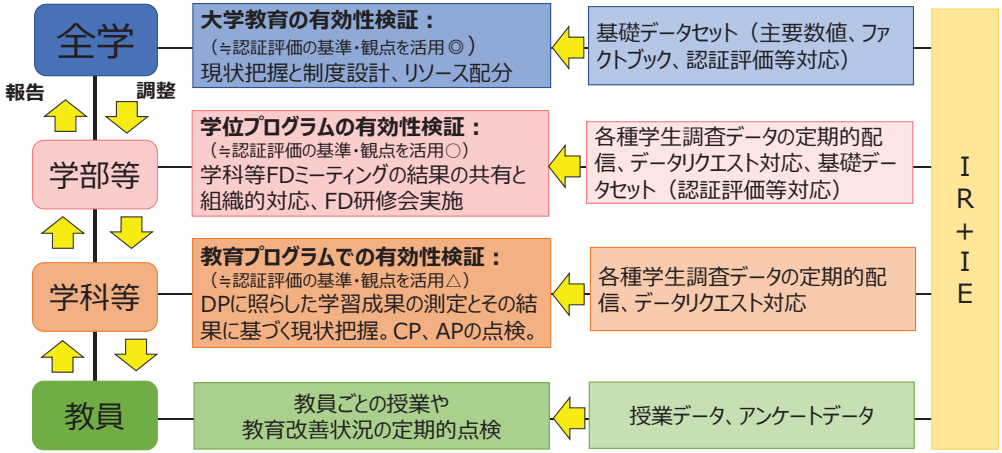
- データ（情報）は、IRが提供する。先生方には、議論をしてもらう。
- 毎年、ある時期になると「ああ、そろそろIRから新入生調査のデータが来ることだな」と思ってもらえるような状況が理想？
- 例えば、1つの調査で、学修成果をすべて捉える、といったような便利な方法はおそらくない。

→ 教育プログラムの構成員で議論しながら学修成果を捉えていくしかない？



大学改革支援・学位授与機構（2017）『教育の内部質保証に関するガイドライン』

4階層での質保証



Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2019

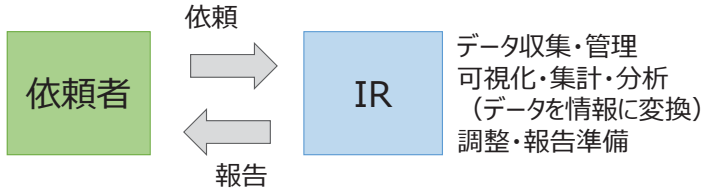
教育改善情報のロジスティクスの整備

- 各大学では、様々な学修成果を測るための取り組みは行われている。
- ただし、それらを現場の先生方が見ているケースは少ない。
- 教育改善に必要な情報が学内で流通するルート、仕組みがあれば、それを使えばよい。
- 無いならそれを作る：それはIRの仕事ではないとは思いますが。
- 情報を必要とする方々が、必要とするときに、必要なものを、必要なだけ、提供できる仕組みを作ればよい。
- 戦略があるならば、その戦略を踏まえ、各現場が動きやすいように、情報を提供していく。（→ 武器、弾薬、人員、車両などを計画的（事前にある程度予測して）流していかないと、勝てない？）

Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2019

IRとは何か

- IRは、Institutional Research の略。
  - データ等で大学執行部や各現場での意思決定や判断の支援を行う機能。
- IR業務とは１）必要な時に、必要な情報を、必要とする依頼者に提供する業務、２）そのためのデータの情報への変換業務である。
  - 単なる数値の羅列のようなもの（データ）を依頼者が使いやすい形（グラフ、主計表、場合によっては考察付）つまり「情報」に変換するのもIRの業務。
- 学内の情報ロジスティクスについても担当？（改善を仕掛けるのは誰？）



Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2019

まとめ

- 大学教育の組織力を高めるためには、現場が最高のパフォーマンスで活動できるように支援する必要がある。
- 現状を把握するためには情報と目標が必要。
- その２つがあって評価をすれば「次にどうすればよいか」は見えてくる。

→ 現場の方々に、いかに「その気」になってもらうか。

- そのためには、学内で教育改善情報の流通や（可能であれば）ロジスティクスを見直すべき。
- IR（インスティテューショナル・リサーチ）もそれら情報マネジメントの改善は担当するが、事務系職員の方々が多くのデータを持っており、一緒にそれらをどのように学内に展開するかを考えて行かなくてはならない。